

研究所ニュース

No.63 2018.8.31



特定非営利活動法人

非営利・協同総合研究所いのちとくらし

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-7-8 東京労音お茶の水センター2階

Tel. 03-5840-6567 Fax. 03-5840-6568

E-mail: inoci@inhcc.org <http://www.inhcc.org>

【副理事長のページ】 (No. 63)

天保四年の台風、岡田真澄「かみつふさに三たび遊ぶ日記」から

(2018年8月1日) 八田 英之

このところ、医療と福祉の分野の仕事もそれなりに続け、千葉県自治体問題研究所関連の任務や地元での健康友の会、その外の活動など、結構忙しいと感じています。その外の活動の中で、やや趣味的なのが、西上総文化会・古文書研究会です。今、読んでいるのが岡田真澄の旅日記です。岡田真澄の父は、寒泉という幕府の儒者で、寛政三博士の一人ともいわれる人ですが、真澄は儒学から国学に転向します。彼が、二百俵の旗本を隠居した後、天保二年（1831）から五年間、毎年木更津の友人（歌・国学の弟子）のまねきで木更津や君津・富津に滞在して、鹿野山や鋸山などあちこち小旅行をし、朝から酒を飲み、伊勢物語などを講じ、題を出して歌を詠んだ記録です。その三度目の日記に、天保四年八月一日（1833年9月14日）の台風の記録がありました。

この研究所の研究助成を受けて、千葉自治研で防災問題の研究をし、その後も災害問題をそれなりにフォローしているので、この記述がやや興味深く、紹介してみます。

<日記の記録>

概要を現代文で述べます。真澄は28日から、貞元村釜神（君津市釜神）の中村濱古という人の家に滞在していました。

「八月朔日、今日は雨風荒き日と言い伝えられているが、早朝の空は良く晴れている。ここを立つので、別れの盃をしていたら、巳の中ば（11時頃）から、急に空は墨を流したようになり、辰巳（東南）の風が吹いてきた。家のものが、「今日は、行くのはやめてください。びゃくがくみます」という。海岸の岩が崩れるということであるらしい。午の末（午後2時ちかく）から、更に未申（南西）の風が揉みこむように吹いて、家は地震にあったように震え、雨の足音は地の底まで通るように激しい音を立てた。また薙ぎ風（横殴りの激しい風）で、目も明けていられない。家の大刀自（その家の祖母）が出てきて「サア、家の中の土蔵に入りなさい」というので入った。未の初（午後2時過ぎ）には、特に激しくなり、みんなで大きな炭櫃の周りに身を寄せ合った。同じ半の頃（午

後3時) 雨がやみ、風が収まった」

「外の様子を見聞きするところでは、神社の大杉が倒れて社殿を壊し、多くの松・杉が倒れ、馬を馬小屋から引き出した直後に小屋が倒れた」

「ここから富津あたりまで、潰れ家が二百軒ほど、人も百人余り死んだという」

「翌日、木更津に向かったが、畑沢・小浜の海岸に出ると、海岸には棹・梶・網などの漁具から竈まで打ち上げられていた。火事も起こったらしい。岩角に取付きながら死んだ人もいた。中里という所では、大きな松の根本から一丈(3m)の高さに小舟が引っ掛かっていた」

この災害に直面して、真澄は予定を繰り上げて江戸に帰ります。江戸でも家が壊されたなどの被害があったようです。

<考察>

この日の台風の記録は、他にもかなりあるようです。八王子では、朝8時から、午後2時まで暴風雨。江戸では、8時から風雨が激しくなり、10時大雨、11時頃一時弱まり、11時半に大暴風雨となり、神田の三十三間堂が倒れ、霊巖嶋等でけが人が出た。上って屋根が飛ばされるのを防ごうとした人が、屋根ごと飛ばされて死んだ。風がやんだ後に高汐が起こった、などの記録が紹介されています(int)。

台風の風は、反時計回りですから、南東の風から南西の風になったというのは納得できます。さらに、江戸の記録を考えると、この台風は東京湾から江戸を直撃したものと思われます。そして、東北の太平洋に抜けていったのでしょうか。被害の記録は、今日ほど正確ではありません。高汐の被害も相当なものであったでしょう。そして、真澄の記録は伝聞ですが、それでも、二百軒の家が潰れ、百人が死んだということに近い事実があったのなら、この台風で最も被害の大きかったのは、千葉県であったのかもしれない。

天保四年は、飢饉の始まりの年でした。打ち続く異常気象で、農村が疲弊し、社会不安が広がっていきます。それは、幕末動乱につながっていきました。

2018年は、2月の北陸豪雪に始まり、6月大阪北部地震、台風7号で沖縄・九州に被害、7月中国・四国豪雨被害、さらに台風12号は、今までに見たこともないような進路で、東から西に駆け抜けていきました。その上、新記録になりそうなこの暑さ。なんともやり切れませんが、世の中を変えていくスタートの年、あるいはその準備を整えた年、と振り返って思えるようにしたいものです。

(はった ふさゆき、研究所副理事長、千葉勤労者福社会理事長)



○研究助成決定と奨励研究のご案内

2018年度研究助成には20件の応募があり、5件(合計232.6万円)の助成が決定しました。また今年度から新設となる奨励研究の概要は下記の通りです。詳細はウェブサイトに掲載していますのでご覧下さい。

【奨励研究】対象：実践家(年齢不問)や研究者(応募時に概ね40歳未満)で、「非営利・協同」や「いのちとくらし」に関する調査・研究の成果(1万字以上)を2年以内に『いのちとくらし研究所報』へ投稿できる者。会員かどうかは問わない。金額：1件10万円以内(予算の範囲で通年募集)。



【役員エッセイ】

マルクス・エンゲルス THE YOUNG KARL MARX

小磯 明

『研究所ニュース』No.62 (2018.5.31) の杉本貴志先生のエッセイ「自由と寛容の危機」の中で、ジョン・スチュアート・ミル『自由論』(1859年)とともに、カール・マルクス『経済学批判』(1859年)についても触れられている。マルクス生誕200年を迎えて、先生は、マルクスの「思想の再評価や再批判が盛んであるが、それを生み出した背景のあり方についても、もう一度振り返っておく必要があるだろう」と述べている。イギリスやアメリカといった先進民主主義社会で培われてきた言論や思想の「自由」を尊重する個人と社会の姿勢について日本の現状と比較して述べているのだが、マルクス生誕200年に関しては少し触れる程度となっている。

本格的に論じるには私はその立場にないが、『研究所ニュース』のエッセイとして、取り上げるのならよいのではないかと考え、私ごときで大変恐縮なのだが、映画の紹介なら書けると思い、今回の投稿を事務局にお許し願った次第である。

若きマルクスとエンゲルスの物語

2017年は『資本論』刊行150周年にあたっていた。そして2018年はマルクスが生まれて200年目の節目にあたる。

岩波ホール創立50周年作品第3弾／カール・マルクス生誕200年記念作品「マルクス・エンゲルス THE YOUNG KARL MARX」は、2018年4月28日より東京・岩波ホールほか全国で順次公開された。

物語は1843年初頭の絶対王政下のプロイセンでの出来事から始まる。イギリスで産声をあげた産業革命以降、欧州の社会体制は大きく揺らぎ、多くの貧困と差別があちこちで生まれていた。「かつては森は民のものであったが、いまや枝1本であっても山の所有者のものであり、暖を取るためにそれを採集することは、自分の命を引き換えにすることでもあった」。冒頭からスクリーンに映し出されたのは、静かな森の中で、枯れ木の枝を拾い集める貧しき人々の群れであり、そこへ蹄鉄の音を響かせながら勢いよく近づいてくる馬の群れ。そして馬上の屈強な男たちはサーベルを振り上げ男女の別なく次々にめった打ちにする目を覆うばかりの惨劇であった。まさに19世紀半ばの絶対王政下のヨーロッパを活写する象徴的な出来事である。ここで描かれる「木材窃盗取締法」については、マルクスによる新法批判として有名である。マルクスは「木材窃盗取締法にかんする討論」という論文で、近代的所有において木材という物を崇めて、人間を犠牲にする転倒した関係が成立していることを見出していた。学者の論文ではなく、ドイツの『ライン新聞』で新聞記者＝ジャーナリストの立場から、新聞紙上でその新法を批判したことは銘記されるべきである。

公然と国家を告発するマルクスの先進的だが行き過ぎた言説は、当局の取り締まりに遭い、新聞は発禁処分になる。やがて彼はドイツを後にし、フランス・パリを目指すこととなる。

エンゲルスはどうか。映画序盤でのエピソードだが、過酷な労働条件（指を切り落と

した女子工員を働かせるなど)の下で不満をぶつけるアイルランド人の女子工員メアリー・バーンズは、啖呵を切っつてふいと職場を飛び出してしまふ。同姓同名の父フリードリヒ・エンゲルス(1976-1860)は驚きあきれはててなすすべもない中、エンゲルス(息子)はメアリーの後を追って貧民街へ迷い込む。

イギリス・マンチェスターの紡績工場のオーナーを父に持つフリードリヒ・エンゲルスは、父親の専制的経営方針に疑問を持ち、労働者の実態に迫ろうと貧民街に幾度となく足を運び、搾取され続ける労働者の絶望の表情を目の当たりにしていた。エンゲルスの貧民街での調査を助け協力したのは後にエンゲルスの妻となるメアリーであり、この調査は後に『イギリスにおける労働者階級の状態』執筆につながり、エンゲルスは名を挙げていくこととなる。

1844年パリに渡ったマルクスは、かつて男爵令嬢であった妻イエニーと娘とともにつましい生活を送っていた。しかし、彼の論説はドイツ時代以上に先鋭的であった。革命の先鋒であったアナキズムの始祖といわれるブルードン(ピエール・ジョセフ・ブルードン)は、“所有”について、曖昧で抽象的な言葉でしか表現せず、保身に走っており、マルクスはそんなブルードンに幻滅を覚える。だがその頃、マルクス一家の生活も困窮を極め、徐々に追い詰められていく。

同じ頃、パリに出向いたエンゲルスは1944年に2年ぶりにマルクスと再会する。一度ベルリンで会っていたが、互いの印象はよくなかった。当時マルクスは、自分が嫌悪していた空想的社会主義者の一派だとエンゲルスをみなし、冷淡な態度を取った。しかしその後発表されたマルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」にエンゲルスは感銘を受け、マルクスはエンゲルスが発表した「イギリスにおける労働者階級の状態」を絶賛する¹⁾。スクリーン上の会話は次の通りである。エンゲルスが「君は天才だ」と称賛する。すると、すかさずマルクスが「君の書いたものは前人未到の第一級の論文だ。どうしてあんなに労働者に精通しているんだ？」と問う。エンゲルスが「いろいろあってね、実は恋愛のおかげだ」と答える。

再会した二人は互いを認め、あつという間に意気投合し、当時のパリでもっとも有名なカフェであったカフェ・ドゥ・ラ・レジャスで、一晩中ワインを酌み交わしながらチェスに興じる。二人の話し合いは10日間にも及んだ。永遠の友を得た瞬間であり、共著『共産党宣言』誕生へと繋がる、奇跡的な夜となった。

プロイセン国王の暗殺未遂事件が起こるなど、ヨーロッパは大きな変革の嵐の中にあつた。そんな中二人はついに“青年ヘーゲル派”を批判する共著『聖家族』を出版する。だがエンゲルスは支配階級でありながら共産主義を啓蒙するという自身の立場への葛藤に悩み、一方マルクスは言説が思ったように受け入れられず、生活も困窮を極めていく。そんな二人を、マルクスの妻イエニーとエンゲルスの妻メアリーは、彼らの理想とともに支え続ける。

ヨーロッパでもっとも影響力のあるヴァイトリング率いる“正義者同盟”からマルクスとエンゲルスに声がかかり、二人はそれぞれロンドンに旅立つ。委員会の会議で持論を展開し、同盟へ激しい批判をしたにも拘わらず、マルクスとエンゲルスは“正義者同盟”への正式加入と、新たな綱領作成への参加が認められる。それはやがて「万国のプロレタリアよ、団結せよ」という標語のもと、“共産主義者同盟”へと名前を変えていくのであつた。

『哲学の貧困』を著したマルクスは、その本に飽き足らず自分たちの“宣言”を欲していく。ブルードン、ヴァイトリングの時代は終わりを告げ、若き革命家たちの、新たな時代が訪れようとしていた。激しく揺れ動く時代、資本家と労働者の対立が拡大し、

人々に革新的理論が待望されるなか、二人はかけがえのない同志である妻たちとともに、時代を超えて読み継がれてゆく『共産党宣言』の執筆に打ち込んでゆく。

こうして、永遠の名著『共産党宣言』（1848年）が誕生するまでの激しい日々を描く歴史的感動作である。

注 1) 映画では、「イギリスにおける労働者階級の状態」を絶賛していたが、同書の出版は 1845 年であり、私は、1844 年に『独仏年誌』に掲載された「国民経済批判大綱」だと思う。マルクスは古典経済学への批評家としてのエンゲルスを高く評価していたことを考えると、一層そう思う。

(こいそ あきら、『文化連情報』編集長・法政大学兼任講師)



公助についての辞書の取り扱い

石塚 秀雄

●広辞苑は辞書としては最高度の評価を受けているとあってよい。最近、第 7 版が出た。追加した新語の地名かなにかで間違いがあったというので若干のミソをつけたが、それは百科事典のようなことも含めたいという、流行に迎合したぐらついた岩波書店の短慮の結果であろう。辞書は事典のような情報知識的役割は慎むべきである。ところで久しぶりの改訂なので、広辞苑第 7 版を購入した。手元にある広辞苑は第 5 版で 1998 年に買ったものである。最前亡くなった作家の井上ひさしは広辞苑を本のように端から読んでいたそうであるが、なかなかそのような根性をもてないでいる。

●辞書というものは新語を追加している。言葉は世につれ、世は言葉につれ。時代により新語ができたり解釈がかわったり、あるいは廃れる言葉もある。それは致し方ないことであろう。私は、古い辞書は捨てないようにしている。痛い目にあった反省からである。痛い目というのは少し大げさかもしれないが、以前、1930 年代発行のウェブスターの英英辞典の古本を持っていたが、枕にすればよいくらいかさばったものだったので、古いからいいやと思って捨ててしまったのである。辞書も時代の子であって、言葉の定義や説明が変化したり廃れたりすることを、昔の私は知らなかった。しかし、たとえば 19 世紀の西洋小説を読むときに、やはり同時代の辞書があれば重宝である。現代ではすでに廃語になった言葉や表現は、現代辞書には載っていないことが間々あるからである。ウェブスターを重いという理由だけで捨ててしまった後悔はいつまでも残っている。それで、ボロボロになった辞書でも捨てないことにしたのである。

●前振りが長くなったが、広辞苑はさすがだと思ったのは、第 7 版においても「公助」という「新語」は載っていないことである。電子辞書に入っている小学館の「大辞泉」には「公助」は載っていて、次のように説明されている。

公助「公的機関が援助すること。特に、個人や地域社会では解決できない問題について、国や自治体が支援を行うと。」

ちなみに「大辞泉」では自助、共助についても次のように説明している。

自助「1. 他人の力によらず自分の力だけで事を成し遂げること。」

共助「1. 互いに助け合うこと。互助」

いわゆる自助・共助・公助について大辞泉は三点取りそろえて説明をしている。私としては自助・共助は言葉として成立するが、公助という言葉はアウトだと思っている。だから、いわゆる「自助・共助・公助」論は、そもそもが間違った議論だと考えているのである。

ところが、広辞苑第7版では、「公助」は新語として採用されていないのである。さすがに岩波の辞書部は見識があると思った次第である。「公助」という概念は成立しえない、という私の持論を傍証するものと思われる。広辞苑の第5版も今度の第7版も、自助、共助の説明はあり、いずれも同一文章で変更はない。次のようである。

自助「1. 自分で自分の身を助けること。他人に依頼せず、自分の力で自分の向上・発展を遂げること。」

共助「1. 助け合い。」

ところで、辞書作りは、大体は、先行の辞書の記載説明を参考にしながら、あるいは今風にいえば、コピペをしたり、ちょっと表現を変えたりして作るものなのである。だから大辞泉の「自助」「共助」の説明は、大修館書店の「明鏡国語辞典」第2版の説明とほとんど同じ文章である。しかも、明鏡国語辞典にも「公助」は載っていない。さすが辞典専門の書店である。小学館だっていい辞典を出している。とりわけドイツ語大辞典やスペイン語の西和中辞典などは他の追随を許さない出来で、私も愛用しているものである。

●しかるに残念なのは大辞泉の「公助」である。国語辞書と外国語辞書では作り方がまったく違う。外国語辞書作成はいわゆる素人が口出しする余地はほとんどない。しかるに国語辞書の場合は、新語や流行語など、国内の言語素人の大向こうが介入する余地が多いにありそうだ。大辞泉の「公助」記載は、なんらかの忖度のたまものである。

第一、「公助」の説明がでたらめである。まず、私から言わせれば、「公助」という言葉そのものが造語であってでたらめである。公を公的機関、国や地方自治体と見なしているが、公、public という概念定義は難しいものである。公益、公共といえ、必ずしも公的機関、国や地方自治体の提供あるいは関与する益でも共同でもない。ということの一つ取ってみても、公の議論はややこしいものなのである。また、仮に公が国や地方自治体を指すと限定するとしても、「特に、個人や地域社会が解決できない問題について、国や自治体が支援する」などという文言は、もっともらしい戯言である。国や自治体の目的は助けるためのものではなく、国民や住民の付託を得て行政を行うものである。Public service という言葉が一般的であり、公は奉仕するものであって、援助するものではない。したがって public help という用語は存在しないのである。何人かのアメリカ人に聞いたのだが、このような表現はないと言っている。

日本で誰が「公助」なる用語を造語したのかは知らないが、よほどの知恵者かよほ

どのもの知らずであろう。国や地方自治体が上から目線で、助けてやるなどとおこがましいことを言う立場にはないはずだが、そういうことを言うことを許しているとするれば、言われている方はばかにされているのである。

●自助、self helpは明治時代にイギリスのスマイルズの「自助論（西国立志編）」が翻訳されて広く読まれたことにより日本でも知られるようになったが、もともとはキリスト教の用語である。ところでこのselfというのは「私自身」ということではない。それはmyselfである。Our selves, themselvesもあり、またself timerなどもある。要するにselfは自身ということであって「私」ではない。自己責任論に引きずられて、自助の本来の意味を取り違えてはいけない。また、国語辞書において「共助」の説明が貧弱なのは、この概念についてあまり論じられていないことによるのであろう。共助、mutual helpはよく協同組合原則のひとつだと言われているが、国語辞書にはそのくらいの説明があってもよいのではないだろうか。ドイツの協同組合原則は俗に、自助、自己決定、自己責任の3つと言われている。いずれもselbst(self)という言葉が頭についているのであるが、どうもドイツはsich（自身）とかselbstということ、もの考えるときに頻用するようである。

●ところで国家援助という言葉はドイツで使われたことがあるのである。それは、マルクスの「ゴータ綱領批判」の議論の中で、ラッサール派が使った用語の一つであった。ラッサール派は労働者協同組合を国家補助(Staat Hilfe)を通じて育成すべきだとしたのに対して、マルクスは反対して労働者自身によるものでなければならぬとした。この議論は現代ではどのように扱われるのか。すくなくとも「公助」などというへんてこな造語はなくして、まっとうな議論をすべきであろう。

Fin

(いしづか ひでお、主任研究員)

外国語勉強法(3) 大高研道氏の場合(その1)

機関誌やニュースでは非営利・協同セクター、医療・福祉に関する海外の動向を扱います。海外の事例を知るには外国語取得が必要ですが、日頃触れないままに過ごしていると、外国語表記は単なる模様や記号にしか見えません。もう少し外国語を日常へ組み込めないかと思うものの、自分の浅知恵には限界があります。

先達の皆様は、どのように取り組んでおられるのでしょうか。生の声を聞くことが出来るならば眠らせるのはもったいない、ニュースに載せれば他の人にも役に立つ、そんなことでいきなり始まった超私的な企画、不規則連載の予定です（事務局 T）。

質問事項

(0) 名前と肩書き、ご専門など、(1) 何語についてですか（複数の場合もお書き下さい）、(2) 勉強時間、頻度はどのくらいですか。また継続の秘訣は何ですか、(3) 読む、書く、聞く、それぞれのコツはありますか、(4) 専門的にここは押さえないというポイントをお教え下さい、(5) インターネットなどをどのように利用していますか、(6) お勧めの書籍や教材、ウェブサイトなどをお書き下さい、(7) その他、自分で決めていることなどをご自由にお書き下さい

「コミュニケーションの手段としての英語」①

大高研道

質問事項 肩書き：明治大学政治経済学部教授 / 何語についてですか：英語

はじめに

外国語（英語）を学ぶことの意味

外国語の学習法シリーズとしての依頼であるが、私自身は語学のスペシャリストではなく、むしろ外国語（英語）は苦手であった。そのため、今回は、外国語の「劣等生」がいかにして英語に関心を持つようになったのか、という自伝的ストーリーを紹介することを通して、外国語を学ぶことの意味といくつかのポイントについて私見を述べさせていただくことにしたい。

多言語学習の意味

最近、家族と一緒にテレビのクイズ番組をみていたら、英語の発音が異次元の高校生が出演していた。聞くと、英語のみならずヨーロッパ各国の言語、さらには聞いたことのないようなアフリカの言語まで習得しているそうである。どうしてその高校生はそれほど多くの言語を習得したのか、その理由までは分からないが、ひとつ言えることがある。必ずしも一言語に特化した勉強が語学習得の近道ではないということである。例えば、ほとんどの日本人は、学生時代に一定程度の英語を勉強してきた。しかし、相変わらず英語は苦手だという人は多い。とくに会話。そのような人が他の言語に「逃げ」ても、結果は変わらない。もし中国語を学びたい人がいれば、英語で中国語を学ぶというのもひとつの方法である。そのことにはいくつかの効果がある。一つは、とにかく頭を回転させる。二つは、英語の能力アップにもつながる。そして、三つは、日本語で考えない習慣がつくということである（この点については後でも言及する）。

何のために外国語を学ぶか？

とはいえ、先に言及した高校生は、やはりある種の才能をもっている人間ともいえるだろう。語学の専門家や言語学者になるつもりがないのであれば、外国語を学ぶ上で理解しておかなければならないもっとも大切なことは、「言葉は手段であり、それを学ぶことが目的ではない」ということである。何のための手段かといえば、それはコミュニケーションである。ここでいうコミュニケーションには、他者理解だけでなく、異文化理解や時空を超えた先人の教えや思いから学ぶという歴史的な側面も含む。

学校教育の弊害をこの期に及んで語る気は毛頭ないが、学生時代の私は英語が苦手だった。中学校に進級してから学び始めた英語であったが、最初の授業でほとんどの同級生がすでに 50 音をローマ字で読み書きすることができた。スタート時点で挫折した。後で知ったのだが、小学 4 年生の時に北海道から山形に転校してきた私は、授業の進捗状況の違いからかローマ字にふれる機会を逸していた。

その後は、テスト対策のために、それなりに英語を勉強したが、私の語学に対するネガティブなイメージが払拭されることはなかった。テストのために勉強はするが、なぜ学ぶ必要があるのかが分からなかった。

外国語に関心をもったきっかけ

転機は、大学 2 年時にやってきた。両親が一年間の在外研究で訪問していたカナダに、夏休みを利用して一ヶ月滞在した経験がその後の人生を変えることになった。ただし、

カナダで大きな学びや人との出会いがあったということではない。一ヶ月の滞在中は、まったく英語を話すことができなかつたのである。むしろ、私の語学の勉強は、帰国後に始まった。その原動力は「悔しさ」からといってもよい。

とは言え、その頃は、NHK のラジオ講座を聞いたり、英会話スクールに通ったりといろいろとチャレンジしてみたが、あまり上達しているという感覚はなかつた。第二の転機は、大学院時代、研究室にマレーシアからの留学生ズーさんがやってきたことによつておとずれた。ズーさんはまったく日本語が話せなかつた。いつのまにか彼の世話役のようになっていた私は、ほぼ一年間、唯一の共通語である英語で会話をすることになった。ズーさんはとにかくよく質問してきたので、そのたびに辞書を引いた。人生でもっとも英語の辞書を使用した時期だつたのではないだろうか。ズーさんとの出会いは、私の英語観を 180 度転換させることになった。ズーさんは、文法的には「あやしい」英語を話し、アクセントにも癖があつた。私の英語が世間一般に「発音がよい」といわれる方とは異なるのは、後に留学するアイルランド独特の英語の影響も強いが、振り返ればマレーシアなまりといったほうが正確かもしれない。

このように、必ずしも「正統派」の英語学習の経験がほぼない私ではあるが、これらの経験を通して、英語（外国語）とは何か、何のために必要なのかを自分なりに理解し、語るができるようになっていた。それは、大きな財産となつた。

第三の転機は、1994 年に中川雄一郎先生が中心になってロッヂデール公正先駆者組合生誕 150 周年企画として実施された現地調査ツアーに同行させていただいた経験である。イギリス留学を具体的にイメージするようになったのは、この訪問が大きなきっかけとなつたのであるが、それ以上に中川先生の現地での立ち振る舞いは、私の留学観を根本から覆すものであつた。翻訳書も多数あり、英語の読解力には定評のある中川先生であるが、失礼ながら、かならずしも流暢に英語をお話になる方ではない（すみません！）。しかし、先生が留学しておられたブラッドフォード大学やロッヂデール記念館など、どこに行つても中川人気はすさまじいものであつた。そして、先生は堂々と自分の主張を語つていた。たいてい日本語で（笑）。しかし、現地の人びとは真剣に理解しようと身を乗り出して先生の話聞き、周りには自然とその会話をフォローする方が集まつてきた。その時、私は英語（言葉）はあくまでもコミュニケーションの手段であり、語るべきものを持っているか否かがむしろ大切であることを学んだ。私もあのような研究者、大人になりたいと思つた。外国語学習とは少し離れてしまうが、憧れやモデルになる存在がいたということは、可能性や潜在能力を引き出す大きな力になる。今、私は当時の中川先生とほぼ同じ年齢である。そのような存在になつたとはとても思えず、気分は相変わらず 20 代のままであるが・・・。

ロッヂデール訪問から 3 年後の 1997 年、当時在籍していた北海道大学から交換留学で一年間、イギリス北アイルランドで学ぶ機会が与えられた。結局、一年後に留学先のアルスター大学大学院に進学し、5 年間滞在することになつたのであるが、そこでの経験は以下、与えられた設問に織り込みながら言及させていただきたい。

1. 勉強時間、頻度、継続の秘訣

語学の専門家になることやテスト勉強としての語学学習法について語ることを目的としていない立場から「暴論」を述べれば、目的のない外国語の「勉強」は、あまり意味がない。そのことを踏まえた上で、標記の質問に答えるとすれば、まず、語学能力は学習量に比例する形ですぐに成果がでるものではない。北アイルランドに留学した最初の一年は、テレビや現地の人びとの言っていることはほとんど分からなかつた。ところが、

ある日突然、すっと入ってくる時が来る。そして、暫く停滞する時期があり、また急に理解力が向上する。図にすると成長曲線は以下のようになる。



とくに、最初の段階は意気込みも強いので、その頑張りに応じた「成果」への期待も高い。しかし、すぐには成果が現れないので、意識の上でも長く感じられるこの我慢の時期はもっとも辛いかもしれない。私の場合、日本人がほとんどいなく、今のようにインターネットを介した通信技術も発達していなかった北アイルランド留学時代の5年間は、ある意味では24時間365日が語学の勉強時間とも言えるが、必ずしも外国に住まなくても学習はできる。ただし、習慣化させることが大事である。寝起きの朝15分、或いは就寝前の15分といった形で、英語(外国語)に接する生活スタイルを確立することは、有効な学習方法だと思う。朝はニュースや朝ドラを英語で視聴するといった「ながら勉強」、就寝前はその後に頭脳に新しい情報が入ってくることがないので、小文を読んだり英単語を覚えたりするのに適している。

継続の秘訣は、無理をしないということ(ダイエットと同じ)と、常に学習した内容を自己文脈化してみるということである。今覚えた単語や表現を具体的なライフシーンを思い浮かべながら実際に口に出して話してみる。独り言でもよいし、家族や友人との会話に使ってみてもよい。言葉は使わないと出てこない。

2. 読む、書く、聞く、それぞれのコツはありますか

まず、最初に共有しておきたいことは、語学をコミュニケーションの手段として捉えれば、外国語であろうが日本語であろうが、その基本的役割は同じであるということである。逆に言えば、日本語(母国語)でもほとんど本を読まない人、文章を書く機会がない人に外国語を学ぶためのスキルを説いても、あまり意味がない。他方で、文法上の違いなどがあっても、読み書きの基本(目的)は日本語と相違ないことを忘れてはならない。

■ 読む

邦文を読む際、私たちは自然と流れの中でポイントを把握しようと心がける。英語も同じである。書かれていること全てを覚えることは日本語でも不可能であるから、ポイントを理解できればドンドンと先に進んでいく。厳密に訳すと息切れしてしまうので、大まかに理解できていればよい。学習プロセスという観点からすれば、最初から完璧を求めないことが重要である。できれば、初読の際はハイライトしないことをお勧めしたい。ただし、どうしてもその単語が理解できないと文脈を把握できない場合などは、線を引いておくことは問題ない。重要な箇所は結局読み直すことになるので、まずはなるべく間をおかずに通読することが最優先されるべきである。また、読むスピードは、読む量が増えれば増えるほど自然に早くなる。これも日本語と同じである。

■ 書く

どのような文章を書くか、誰に書くか、何のために書くかによってアドバイスの内容は異なる。おそらく日常的にもっとも頻度が高いのはメールだと思われる。その際、一番有効なのは、自分の型を持つことである。言葉は文化でもあるので、一概には言えな

いが、管見の限り、英語圏のケースでは趣旨をダイレクトに伝えてくることが多い。時候の挨拶や前置きが長すぎると、相手に趣旨が上手く伝わらないことがある。よって、何を伝えたいかは明確にし、その箇所のセンテンスには細心の注意を払うべきである。逆に、冠詞や文法上の厳密さは、メールなどの日常的な連絡の際にはあまり気にせず、むしろ依頼文などへの返答等は迅速に行うことの方が大切である。

論文等のように、パブリックな媒体に掲載されるケースは、少し様相が異なる。これは、読むことも連動するが、日本語に変換しないで、英語で理解し、考える癖をつけておくことが肝要である。つまり、英語で論文を書くのであれば、英文の論文・書籍を参照し、それと同じ思考で執筆する。そこに日本語を介してしまうと不自然な文章になる。私は博士論文を英語で執筆したが、それを邦訳するとすると結構厄介な作業になることが想定される。逆に、日本語で執筆した論文を英訳するのは、日本語を介しているからこそ難しい。出来ないことはないが、それをするのであれば、初めから英語で考え執筆したほうが楽である。その際、英単語の意味を英英辞書で調べることをお勧めしたい。ハードルが高いように感じるかもしれないが、実は慣れるとそれほど大変なことではないし、なによりも英語での思考力が高まる。

■ 聞く

おそらく外国語を習得したいと考えている方々の多くは、会話ができることを望んでいるのではないだろうか。その際の最大のハードルは「聞く」ことであろう。前述したように、急激にヒアリング能力を高めるための近道はない。1日10分でもよいので、習慣化させることが肝要である。最近ではテレビでもバイリンガルのプログラムが増えているし、インターネットでも簡単に海外のニュースを聞くことができる。題材としては2つのアプローチが有効である。一つは、最新のニュースを聞くこと。そのメリットは、ニュースであれば日本でもある程度話題になっているので文脈を把握しやすいこと。二つは、同じものを何度も聞くこと。何回も聞き続けていると、耳が慣れるだけでなく、ひとつの「話すパターン(型)」を身につけることができる。

なお、少し「上級者」むけの話になるが、通訳を頼まれた時は、少し英語が話せる程度では対応できないことがある。専門家であれば別であるが、一般的に直面する困難は、①文脈がつかめないこと、②なまりがあることである。10年ほど前に当研究所が企画したスウェーデン視察に同行させていただいたことがある。現地に着いたら、いきなり通訳を頼まれてしまった。初日は医療関係の単語が頻出する会話のため、全体として何を説明しているのかさえ把握できなかった。むしろ、同行している医者の方々が理解していた。つまり、何を聞きたいかがはっきりしていたから、何を説明しているのかを想像しやすかったのだと思う。門外漢の私は全くついていけなかった……。概ねの文脈が把握できるようになった3日目くらいになると、ある程度の通訳をすることができるようになったが、「3日間で急激に英語がうまくなったね」と「ほめられた」時の心中は複雑だった。

なまりも難敵である。ただし、「ネイティブ」の人たちも他地域の人びとの英語には苦勞することがあることを知っておくことは、自身が実際に英語を使う際に心理的に気楽になるので少し触れておきたい。北アイルランド留学時代にスコットランドからの調査団が来たときのことである。アイルランド人、スコットランド人双方が相手のなまりについていけず、毎回、私の顔を見て助けを求めたのである。時間がたつと徐々に解決していったが、その時の双方の顔を思い出すと今でも思わず笑ってしまう。

(その2に続く)

○事務局活動報告

【5月】

- 11日 第6回事務局会議
- 18日 第6回理事会
- ・機関誌・報告書編集
- ・定期総会、15周年シンポジウム準備

- ・機関誌・報告書編集
- ・定期総会、15周年シンポジウム準備
- ・助成審査準備
- ・NPO書類準備

【6月】

- 14-20日 ビアヴァーティ先生来日
- 16日 定期総会、第1回理事会、15周年シンポジウム（東京）、
- 17日 15周年シンポジウム（京都）
- 21日 GSEF ビルバオ準備会報告（石塚）
- 25日 研究助成募集締切
- 26日 明大研究会参加
- 29日 会計共同ユーザー会参加

【7月】

- 04日 研究助成審査委員会
- 13日 第1回事務局会議
- 20日 第2回理事会
- 30日 協同組合研究所座談会参加（竹野）
- 31日 研究助成通知
- ・機関誌・報告書編集
- ・助成審査通知
- ・奨励研究案内

6月に開催した15周年記念シンポジウムの際に、イタリア・ボローニャから家庭医のビアヴァーティ先生に来日いただきました。シンポジウムについては報告を作成予定ですが、同行した際にちょっと見聞きしたことを書いてみます。

東京のシンポジストでもある中村先生の診療所に伺い、診察所の案内や訪問診療への同行をさせていただきました。その後の懇談の中で、医師の研修制度についての話がありました。ビアヴァーティ先生が研修医だった頃、イタリアでは患者に触れることが出来たのに、今の制度では観察するだけで触れることが出来ないそうです。日本とイタリアの医師お二人は、患者に触れて診るのが基本だと言っておられました。制度その他、さまざまな違いはあっても、医師として共通する意識があることを知った一瞬でした。

またシンポジウムの際に、ビアヴァーティ先生がボローニャの案内をしてくださいました。実はこの部分、時間の都合上、省いていただけないかと先にお願ひし、当日、復活したという通訳泣かせのパートでした。京都の通訳の方はボローニャ在住の方でしたが、後からボローニャの人は地元が大好きであり、ご自身もボローニャ愛にかなり染まったと笑って教えてくださいました。そして講演の最後で、ビアヴァーティ先生はなぜ家庭医を長年にわたって続けられたかという問いかけをし、先生がロードバイクに乗るスライドが写り、自転車に乗ることでリフレッシュしていたからだと答えていました。長い長い上り坂を自転車で行くのは、ボローニャ案内を聞かないと想像できなかったかもしれません。ワーク・ライフ・バランスを上手にとっておられるご様子は、ぜひ見習いたいものだと思います。

大阪北部地震が起きた6月18日は、ちょうど京都での視察を予定していました。今回、先生のご息ご夫婦がバカンスで一緒に来日されており（途中は別行動）、宿泊したホテルが揺れてご息ごはとでも驚いていたそうです（先生は平然となさっていました）。視察を予定通り行い、翌日の移動だったので東京へ無事に戻ることができましたが、もし新幹線が止まったらどうすればいいのとかかなり焦りました。外国人旅行者への情報提供などにも配慮しなければと学びました。（竹）

